ブラジルにおける農業事業への取り組み
―わが国ひいては世界の食糧安全保障と食の安全確保に向けて

中山　立夫（なかやま　たつお）
ブラジル三井物産株式会社　社長

ブラジルのポテンシャルと当社の4つのコア事業

BRICsの一角として、そして2008年は日本移民100周年としてブラジルが脚光を浴びていることは、当地でビジネスに携わる一人として非常に嬉しく、次の100年の礎を築く大きなチャンスであると思っている。

これほど多くの豊かな資源に恵まれている国は他にないであろう。鉄鉱石をはじめとする鉱物資源や石油、そして環境に優しいエネルギー資源として、世界から注目されているサトウキビ原料のバイオマス・エタノール、さらに、食糧資源に関しても、大豆、砂糖、コーヒー豆、牛肉、オレンジ等がいずれも生産量で世界1位ないし2位を占めており、今後、世界の人々の生活レベルが上がるにつれて、ますますブラジルは、その供給基地としての重要性を増していくはずである。

また、近年工業化が進み、国民所得が向上する中、人口1億9,000万人を擁する巨大な消費市場としての重要性もにわかにクローズアップされている。

さらに、われわれ日本人にとって大きなメリットは、元来多様性を受け入れやすい多民族国家であること、明るく人のよい国民性であること、そして何といっても150万人の日系人の存在と歴史があることである。笠戸丸による移民開始から2008年でちょうど100年、この間築かれた「勤勉で約束を守る」という日本人に対する「信用」こそ、ビジネスにおいても最大・無形の財産といえるであろう。

このような環境の下、ブラジル三井物産は、ブラジルの社会とそこに住む人々の暮らしが豊かになるよう、また、日本とブラジルの関係がより親しく緊密なものとなるよう、次に述べる4つの分野をコア事業領域と定め、これに当社の総合力を結集して正面から取り組んでいる。①鉄鉱石や石油・ガス、エタノールといった資源・エネルギー分野、②大豆やサトウキビなどの農業生産分野、③ブラジル国内市場を対象とした販売事業分野、そして④これらの事業領域を底支えするインフラ分野で、今、話題になっているリオデジャネイロ－サンパウロ間高速鉄道計画等もこれに含まれる。

中でも、わが国ひいては世界の食糧安全保障および食の安全の観点から、農業生産分野は今後、ますます重要になってくるものと承知している。

農業生産事業への参入

人口増加や途上国の経済発展に加え、最近では異常気象も頻発するなど、グローバル規模で食糧需給が逼迫（ひっぱく）する中、ブラジルは世界の食糧需要を満たせる数少ない国として注目されている。ブラジルの耕作可能面積は約2億6,000万ヘクタールといわれているが（日本の国土面積の約7倍）、そのうち現在使用されている農地は約6,000万ヘクタール（同約1.6倍）と4分の1にすぎず、広大な耕作可能地が残されている。

当社はこうしたブラジルの巨大なポテンシャ

マルチグレイン社綿繰工場の開所式にて
（左から筆者、ワグネルバイーア州知事、ガルセスマルチグレイン社長、松村三井物産穀物油脂部長）

今まさに収穫期の綿花畑

ルに着目し、2007年8月にブラジルで大豆を中心とする穀物の集荷・輸出などを手掛けるマルチグレイン社に25％資本参加し、全米最大級の農業協同組合であるCHS INC社とブラジル民族系の穀物会社であるPMGトレーディング社と共同運営を開始した。また、11月にはブラジル北東部を中心に約11万ヘクタールもの広大な農地を有し、大豆、トウモロコシ、綿花等の生産を行うシングー社の株式も取得し、同社をマルチグレイン社の完全子会社化することで、農業生産事業にも参入した。これにより穀物の集荷・輸出といういわゆるオリジネーション事業から、さらに一歩踏み込んで、より安全・安心な食糧の供給を可能にする生産から輸出までの一貫管理体制を構築することができた。

わが国政府は、1979年から2001年までの20年以上にわたり、潅木（かんぼく）が多く、農業には適さない「不毛の地」と呼ばれていたブラジルのセラード地域に、日本から専門家を派遣しながら、土壌改良、品種改良、入植農家へのファイナンス等を多角的に行い、同地域での穀物栽培を可能にするという一大農業開発事業（セラード農業開発計画）を、ブラジル政府と共同で行った経緯がある。その結果、セラード地域の大豆生産量は飛躍的に増加し、ブラジルは米国に次いで世界第2位の大豆生産国となった。

他方、当社はセラード農業開発計画に先立つこと約15年前の66年に、すなわち今から40年以上も前に、当時の水上達三三井物産社長がブラジルを訪問した際に、ブラジル政府から農業分野における貢献を求められたことを受け、三井肥料を設立した。同社は、ブラジルの酸性土壌に合い、また、外貨事情の悪かった当時のブラジル経済を勘案して、原料を輸入に頼る必要のない熔燐（ようりん）の製造・販売を目的に設立したもので、爾来（じらい）、大豆をはじめとする農産物増産に大いに貢献してきた。また、ブラジルのコーヒー豆を輸出ないし焙煎（ばいせん）・販売する三井アリメントスも、30年以上の長きにわたり、この地にしっかりと根をおろして事業を営んでおり、当国のコーヒー産業振興に寄与している。このように、当社のブラジルにおける農業関連のビジネスは、長い歴史と経験に支えられており、これらの積み重ねが、今まさにマルチグレイン社を通じた大きな取り組みにつながっている。

当社は、日伯両国家がセラード農業開発計画にかけた熱い思いを継承しつつ、三井肥料、三井アリメントス、マルチグレイン社といった優良グループ・カンパニーを通じて、引き続きブラジルの農業振興に貢献したいと考えている。そして、この広大な大地で森林の伐採などの環境破壊をすることなく、農地と生産を拡大し、今後ますます増加が予想されるグローバルな食糧需要に対応していく所存である。